"江別式土器"の終末年代と所謂"北大式土器"(一)*

石附喜三男

(1)

北海道において，江別式土器あるいは後北式土器と名付けられている土器のグループがある。これが，後にも触れるように，擦文式土器によって標徴される擦文式文化の直前，すなわち，いわゆる続縄文式文化の後半期ないし末期の一時期を画する文化に特徴的な土器形式であるとみることは，今日では異存のないところであろう。

江別式土器は，従来，一般的には"後北式土器"と呼ばれる。後北式土器とは，北海道における"縄文"のみられる土器が，かって"北海道式厚手縄紋土器群"，"北海道式薄手縄紋土器群"等と分類された際の後者に属すもので，それがさらに前期・後期と分たれたうちの後期型を意味するものであり，後期北海道式薄手縄紋土器の省略・短縮化された呼称であることは，故河野広道博士によって始めて提唱され概念規定された，「北海道原始文化聚英」所収の"北海道式薄手縄紋土器群"の項をみれば明らか[(1)]なのである。そして，同項の冒頭の「私はこの名称を，鳥居竜蔵氏によって礼文式と命名された土器，最近江別付近から数百個発掘されて江別式と仮称されている土器群及びそれ等の祖型及び退化型を含む所の同一文化系統に属する土器型式の総称に用ひて居る。」(・点筆者）という記述によって，昭和6，7年頃に現江別市の江別兵村一帯（坊主山，飛鳥山と呼ばれる丘陵から旧豊平川沿岸にかけての広大な台地上）において発見された竪穴墳墓群からの発掘土器資料に対し，"江別式"の仮称の存在していたことが知られるのである。河野博士は，同概説中においてさらに，後北式土器はA・B・C・Dの4期に区別できるとされているが，その区分の基準が主として前記江別兵村一帯から得られた墳墓の土器資料に基づいていることは，この「北海道原始文化聚英」の図版に収録されている資料の点からも，次に述べる名取武光氏の概説との内容の一致点からもまず間違いのないところと思われる。

名取武光氏による北海道の土器についての概説，「北海道の土器」[(2)]は，前記「北海道原始文化聚英」のちょうど6年ほど後に発表された論文である。これら両者はともに，戦前における北海道出土土器についての初の，本格的体系的にまとめられた好著であり，戦後も長く研究の指針とされていたことは周知の通りである。この中で名取氏は，後北式土器が江別の墳墓群の発掘に基礎を置いて，A・B・C・Dの4つの形式に分けられることを明記している（なお，付言すれば，名取氏は後北D式を D_1 式と D_2 式に細分している。これについては，また後に触れたい)。

このように，後北式土器の細分の基準が，江別兵村一帯の墳墓群から出土した資料に基づくものであることは確実なことといえる。そして，そうした土器について，一方では江別式という仮称もかって存在したことも事実のように思われるのである。

さて，戦後になってから河野広道博士は，後北式土器についてさらに"江別型"と"北見型"という地方差に基づく分類をも併せ行なうにいたっている。こうした地方差は，後北A式にお

* 本論文は，昭和45年度文部省科学研究費補助金〔一般研究 (D)〕による研究成果の一部である．

いてすでに認められるとされており，後北B式，後北C式にも存在する[3]とされる。一方，同博士は，その後間もなく発表した他の土器概説[4]において，後北C式土器を C_1 式と C_2 式に細分し得ることを提唱された。その基づくところは注口土器の存在の有無で，それが出現するまでの段階を C_1 式，出現後を C_2 式とし，それまでの土器の底部が浅い上げ底を呈するのが一般的であるのに対し，C_2 式においては平底が普通であるという。こうした注口土器の存在は，たしかに江別出土例をはじめとして，いわゆる江別型の後北C式土器中にはかなり普遍的に認めることができる。したがって，C_1 式・C_2 式の細分もいわゆる江別型を基準として分けられたものとみて間違いない。ただし，こうした細分が，後北C式土器北見型においても存在するか否かは，これらの文献を照合する限りにおいては明らかでない。

なお，ここで若干触れておきたいのは，河野博士がこれらの文献において“後北E式”，あるいは“後北E式＝北大式”なる形式をはじめて明らかにしたことである。それは，後北D式に後続するものであり，擦文式土器への過渡期を示すものというのである。ただし，この“後北E式”あるいは“北大式”というものが，名取氏の前記「北海道の土器」において“後北 D_2 式”と述べられている形式と同一のものとみることは，まず間違いのないところ[5]と思われる。

ところで，このように故河野広道博士，名取武光氏らによって“後北式”と名付けられて以来，ながらく一般的に使用されてきているこの名称にも，二，三の別の呼び名が存在するようになってきている。例えば，森田知忠氏による“坊主山式[6]”がある。同氏は，これをⅠ式からⅢ式に分ける。坊主山Ⅱ式は，後北A式土器江別型といわれるものを含むという。坊主山Ⅲ式は，後北B式およびC式の江別型（この場合のC式は後北 C_1 式）からなるようである。ちなみに，坊主山とは，先にも若干触れたが，江別市におけるいわゆる後北式土器の出土する竪穴墳墓群の所在する地域の一角を占める小丘陵の名称である。なお，森田氏のいう坊主山Ⅰ式は，天塩郡天塩町の天塩川口基線遺跡第3号竪穴[7]出土のセットを基準として設定されている。たしかにこのセット中のあるものは，従来“後北A式江別型”とされているものに非常に近いし，またセット全体として眺めた場合，江別出土の後北A式に直接先行する可能性を認めてよいものかもしれない。ただし，天塩川口基線第3号竪穴出土例のような組み合せが，江別市坊主山およびその周辺の遺跡範囲からそのまま得られる可能性はなはだ薄いように思われる（この点に関しては，後で若干触れることとする）。

さて，後北式土器の別称の他の例は“江別式”である。江別式という仮称が存在することは，前にも述べたように昭和8年に河野広道博士によって明記されている。そして，故山内清男博士は，終始江別式の名称を使用[8]された。他に，林欽吾，佐藤達夫，千代肇の諸氏[9]なども江別式の語を用いている。今，千代肇氏によると，江別式はⅠ～Ⅳに細分されている。この江別Ⅰ式・同Ⅱ式・同Ⅲ式・同Ⅳ式は，それぞれ後北A式・同B式・同C式・同D式（いずれも江別型）に対応するもののようである。

ところで，私もまた，最近では“江別式”の名称を用いるべきとの立場にたっている。その理由を，次に二，三述べてみたい。

まず，後北式の名称が，初めにも述べたようにかって縄文のある土器を厚手式・薄手式と分類した際の後期北海道式薄手縄紋を省略短縮化したものであり，土器の形式名としてはそれよりもむしろ，そうした土器を出土した代表的ないし良好な遺跡名に基づいた方がその形式内容を具体的に把握し得ることがあげられる。この場合，森田氏によって提唱された“坊主山式”の呼称も妥当性を有するもののように思われる。坊主山遺跡は，現在では工場用地と化しすでに消滅したが，ここでの問題としているいわゆる後北式土器を出土する墳墓群の存在した良好

な遺跡であり，その調査報告もいくつかみられる[10]からである。しかし，私としては森田氏の提唱した内容をそのまま受け容れることはできない。何故なら，同氏の坊主山Ⅰ式はこの坊主山遺跡において検出されたものではなく，さらに，その土器複合がこの坊主山において，かつてそのまま得られた可能性もはなはだ薄いからである[11]。また，坊主山Ⅲ式とされるものが，いわゆる後北B式と同C式（C_1 式）とを併せ含むものであることにも異論を唱えたいからである。では，“坊主山式”という名称を私なりに概念規定をし直して使用すればよいということにもなるのであろうか。しかしながら私は，ここで“江別式”という呼称を思い出さずにはいられない。“江別式”の名称は，すでに述べたように昭和10年以前にすでに存在したことは確実であり，戦後にあっては先にも見たごとく山内清男博士を初め数名の研究者が用いているのであって，“後北式”の名ほど一般的ではないにしてもそれに劣らない歴史を有するものなのである。そして，江別市内の，坊主山をも含めそれに隣接する江別兵村（えべつへいそん）あるいは対雁（ついしかり）の地域に及ぶかなり広大な範囲（それは江別市内を横切る石狩川河岸から石狩川に注がんとした支流旧豊平川の彎曲部の河岸に至る，距離にして約2Kmに達する範囲の台地上）にかなり濃密に分布した竪穴墳墓群から得られた土器群を標式として名付けられたもの[12]であった。

ところで，何よりも私にとって“後北式”の語の使用をためらわせずにおかない点は，戦後になってから再度公表された河野博士の後北式土器の内容にある。昭和33年に刊行された『網走市史』の「先史時代篇」によると（これも先に述べたところであるが），後北A式，同B式，同C式の各形式土器には，江別出土のものを基準とする“江別型”の他に“北見型”というものがそれぞれ存在すると述べられている。しかしながら，こうしたそれぞれの“北見型”[13]がそれぞれの“江別型”に確実に対応するものかどうか，言い換えるなら“後北A式北見型”と“後北A式江別型”が，“後北B式北見型”と“後北B式江別型”が，“後北C式北見型”と“後北C式江別型”がそれぞれ同時間的なものとして併行関係にあるのかどうかが，多分に疑問視されないでもないからである。

そのような疑問を提起させるのは，森田氏が天塩川口基線遺跡3号竪穴出土として紹介[14]している一括土器資料である。この中に，“後北C式北見型”とみなし得る資料[15]が含まれるが，もしこれらのセットが同一時期の土器複合であることが確実ならば，他に後北A式江別型に近い土器[16]（従来の概念で言えば後北A式江別型に含めて良いであろう。しかし，森田氏の位置づけのように，氏が坊主山Ⅱ式に含まれるとした後北A式江別型に先行するものとしての分離が可能かもしれない。今後の検討に委ねるべきものである），あるいはいわゆる恵山式土器の系統を引く土器[17]が含まれているところから，“後北C式北見型”は“後北C式江別型”よりも確実に古いという結果が生ずることになるのである。

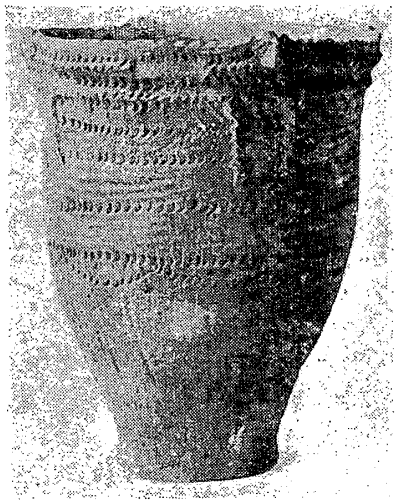


写真1　江別Ⅰ式土器
（江別市坊主山出土，江別市公民館蔵）
高15.0cm，口径12.0cm

このように，後北式土器が，“江別型”・“北見型”という地方差を含むものとして規定されるようになった限りにおいては，その内容に疑問を抱かざるを得ない。したがって，“後北式”という語の使用に対して私はためらいを感ずるのである。現段階ではむしろ，この時期を示す土器形式として“江別型”のみに限定し，江別の竪穴墳墓群出土資料を標式として，それに“江別式”の名を付した方が内容的に誤解を生じなくてよいであろう，そう私は思うので

ある。

さて，いわゆる後北式土器は，当初江別型（江別の墳墓群出土資料）を基準としてA・B・C・Dの4つに細分された。そして，名取武光氏は後北D式をD_1とD_2にさらに細分しており，そのD_2式が河野博士のいう"北大式"あるいは"後北E式"に相当するものであることを先に述べた。また，河野博士が，後北C式をC_1式とC_2式に分けるようになったことについても先に触れた。

ところで私は，後により詳しく述べるが，河野博士のいう北大式土器（名取氏の後北D式）というものが，擦文式土器の成立の初期段階に一時的に併行したものと考えるため，純然たる続縄文式文化は後北D式土器江別型（名取氏のD_1式）の段階で終りをつげると理解している。そして，江別出土資料に基づくA・B・C_1・C_2・Dの細分も妥当なものと諒解している。したがって，私は，後北A式・同B式・同C_1式・同C_2式・同D式（いずれも江別型）をそれぞれ"江別Ⅰ式"・"江別Ⅱ式"・"江別Ⅲ—a式"・"江別Ⅲ—b式"・"江別Ⅳ式"と置き換えて使用するこことしたい。

なお，ついでに付け加えると，江別Ⅱ式と江別Ⅲ—a式の相違は，江別Ⅱ式土器の口縁部から胴部にかけて貼付細隆起帯で形どった横長の亀甲形・菱形そして三角形等が連続的，網の目状に付されているが，その細隆起帯上に刻み目が施こされているかいないかなのである（Ⅱ式には刻み目がみられる）。そして，江別Ⅲ—a式にあっては，細隆起帯上に刻み目がみられなくなるとともに，それによって形づくられている連続亀甲文様・菱形文様等がより丸味をおびてしまい，いわば連続楕円形的に変化してしまうことである（写真2・3及び4）。同Ⅲ—b式になると，細隆起帯は幅も高さも規模を減じ，断面三角形状の"みみず脹れ"的な微隆起線に変じてしまう。そして，2本の微隆起線によって中に特殊縄文[18]のみられる幅狭い縄文帯が形成される。特殊縄文は，こうした幅狭い帯の曲線にそって施こされているのである。また，Ⅲ—a式以前においては，胴部下半から底部にかけて互いの間隔密な縦方向の，しかし時には縞状を呈する縄文がみられるのが普通であるが，Ⅲ—b式にあっては，かなり間隔をあけての明瞭な縦方向の束状の縄文が付されるよう[19]になる。したがって，Ⅲ—b式土器の外面下部には

写真2　江別Ⅱ式土器
（江別市坊主山出土，江別市公民館蔵）
高19.0 cm，口径15.6 cm

写真3　江別Ⅲ—a式土器
（江別市坊主山出土，江別市公民館蔵）
高19.4 cm，口径16.4 cm

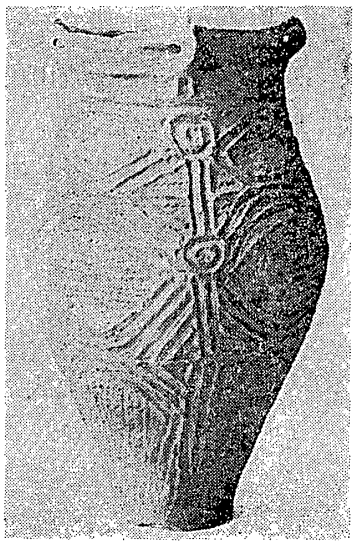
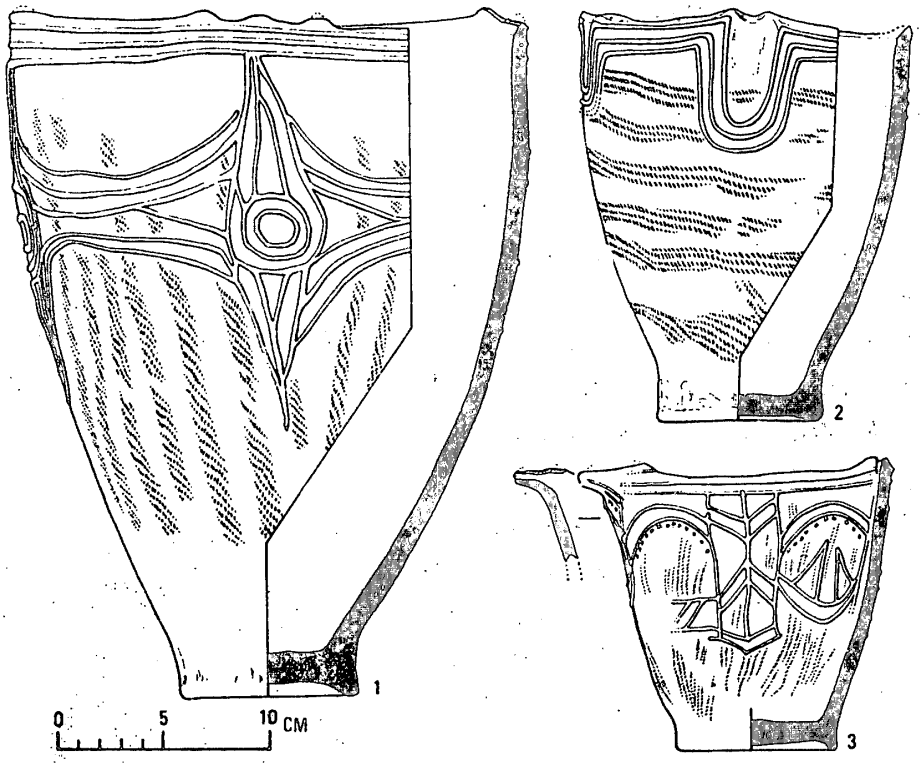


写真4　江別Ⅲ—a式土器
（江別市坊主山出土，江別市公民館蔵）
高19.3 cm，口径10.0 cm

縄文の施こされない無文部分が目立つようになる〔なお，これは次に述べるⅣ式にも当てはまることであるが，これらの束状ないし縞状の縄文帯が幅狭いＲＬの普通の斜行縄文によって形成されている例が，現在のところオホーツク海沿岸において見出されることを付記する必要があるように思われる（第１図[20]及び第２図[21]）〕。さらに，Ⅲ―ａ式以前には，土器の上半部ないし上部⅔ほどの範囲に口縁にほぼ平行する縄線圧痕を模したと思われる連続刻点文様が数本以上みられるが，そしてそれらは，基本的には細隆起帯の貼付以前に施こされるものであるが，Ⅲ―ｂ式では明らかに，微隆起線によって構成される特殊縄文帯の形成以後に施こされ，その方向も必ずしも口縁には平行せず，むしろ微隆起線のカーブに沿ったり，縦位・斜位のものが多くみられるようになる。それも，Ⅲ―ａ式では忠実に縄線圧痕を模して形どられているのに



第１図　紋別郡雄武町開生第20号竪穴出土
江別Ⅲ―ｂ式土器（一括資料，名寄市立図書館蔵）

第２図　斜里郡斜里町禅竜寺遺跡出土
江別Ⅳ式土器（共伴資料，札幌大学蔵）

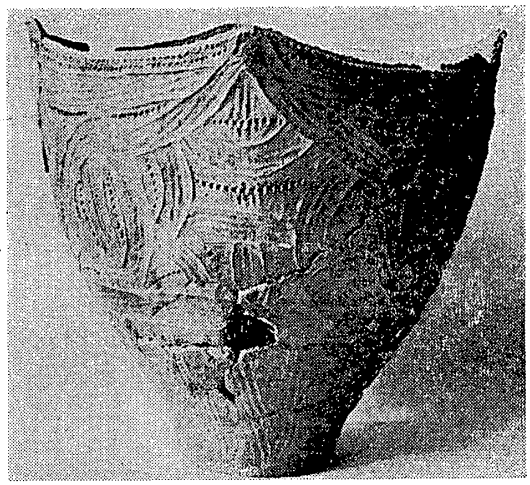


写真5 江別Ⅲ—b式土器
（江別市坊主山出土，江別市公民館蔵）
高 20.0 cm，口径 21.0 cm

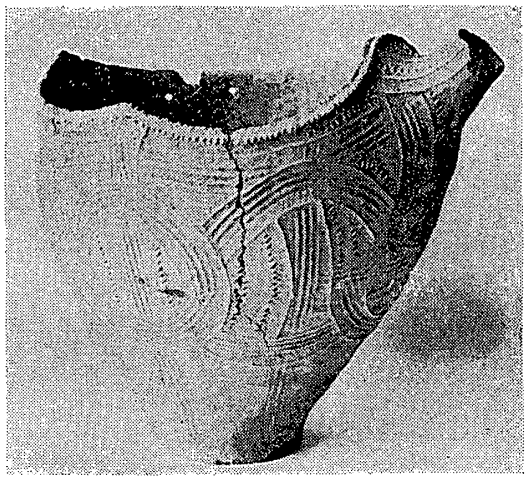


写真6 江別Ⅲ—b式土器
（江別市坊主山出土，江別市公民館蔵）
高 19.0 cm，底径 7.0 cm

対し，Ⅲ—b式では楔形状（もしくは三角形状）の刻点列へと変化している。

器形の上でもⅢ—a式以前とⅢ—b式の差ははなはだ大きい。先に，河野博士が注口形土器の出現をもって後北 C_1 式と C_2 式とに分けると述べていることを紹介したが，たしかにこうした新しい器形の出現（他にⅢ形のものなどがある一方，口縁部に吊耳状の有孔を有し口縁部が一旦くびれ再度胴部が広まる器形のものは，C_2 式において消滅する）とともに，甕ないし深鉢等の器形も高さの割に口径がずっと広がる傾向をみせる。底部もそれまでの上げ底から，平底の方が一般的[22]となる（写真5・6）。

江別Ⅳ式は，Ⅲ—b式にみられた"みみず脹れ"的な微隆起線がまったく消滅してしまい，束状に特殊縄文が，縦横に，直線的に，あるいは弧状に施文される。楔形刻点列文はしばしばそうした縄文帯に沿って付されるが，中には楔形状刻点列文がまったくみられなくなる例も出現してくる（写真7）。器種はⅢ—b式から連なるとみてよい。

写真7 江別Ⅳ式土器
（江別市坊主山出土，江別市公民館蔵）
高 16.1 cm，口径 18.0 cm

さて，このように江別式土器全体を眺めてくると，Ⅲ—a式とⅢ—b式との間にみられる差異は，Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ—aのグループ，Ⅲ—b・Ⅳのグループそれぞれの内部相互間の差よりも一段と大きいように感ぜられる。にも拘わらず河野博士らがⅢ—a・Ⅲ—bを一括して後北C式と呼んだのは，刻み目の付されない貼付細隆起線ないし微隆起線の存在するものを一つのグループとして把握したことによるものである。

河野広道博士はまた，後北D式の一部は，C式の末期と共存し，一部はそれよりも少し後まで存続した[23]と述べている。この後北C式の末期というものが C_2 式といかなる関係にあるかについて，河野博士は明確には述べていない。しかし，「（D式の）器形はC式の末期と同様であるが……」の記載からみても，そのC式の末期なるものが，後北 C_2 式すなわち江別Ⅲ—b式に含みこまれるものであることは明らかであろう。そして，江別Ⅲ—b式と同Ⅳ式がしばしば共伴関係にあることは，河野博士の述べているところであるが，それは実際，江別の墳墓群

の発掘結果[24]に基づくものであろうと思われる。こうした両者の共伴関係から，森田知忠氏は，両者を分けることなく松前郡松前町館浜の墳墓出土例に基づいて“館浜文化”と称している[25]。たしかに，微隆起線の有無によって形式的にⅢ—b式とⅣ式とは分類し得るが，実際の共伴関係例からみると両者の同時間的併存の度合は著しいようであり[26]，江別Ⅳ式のみの時期がどの程度純粋に存在したものか，十分に検討の余地があるように思われる。このような問題点は後でも若干触れるが，宮城県玉造郡岩出山町出土の北大式土器[27]が江別Ⅲ—b式そのものに非常に近い諸要素を有していることから惹起される観点でもある。とにかく，土器形式上，江別Ⅲ—b式からⅣ式への移行が十分になされる暇がないうちに，江別文化[28]ひいては続縄文式文化が終末をとげた可能性がはなはだ強いように思えるのである。

この江別Ⅲ—b式およびⅣ式土器は，その分布の上からも重要である。北海道を中心とした非常に広範囲な拡がりをみせるからである。

いったい，Ⅲ—a式以前の江別式土器の分布はきわめて限られていると言えよう。

江別Ⅰ式土器はとくにその出土例が限られている。現時点での管見の限りでは，江別の墳墓群の他に，江別Ⅰ式に属せしめてよいか，あるいはそれに若干先行するとみなされる例が，すでに述べた天塩川口基線遺跡とともに苫前郡苫前町香川遺跡[29]など，道北地方においてより多く知られている。道南の例としては，千代肇氏によって奥尻島の青苗B地点出土として紹介されているものが現時点では唯一[30]である。江別Ⅱ式になると，網走市モヨロ貝塚，厚岸町オカレンバウシ貝塚など道東方面にも確実にみられるようになるが[31]，道南の渡島半島では現在のところあまり知られず，積丹半島の岩内郡共和町に所在する茶津4号洞窟が今のところ南限[32]である。江別Ⅲ—a式にあっても，現在のところ江別Ⅱ式と大体において同様の分布が確認されているが，東北地方北部にも散点的に見出されるようになる[33]。

それが，江別Ⅲ—b式およびⅣ式の段階になると分布圏は爆発的に拡がる。北海道内全域は言うに及ばず，樺太・千島・本州北部にまで確実にみられるようになる。樺太では鈴谷貝塚において同Ⅳ式土器が出土[34]しており，千島にあっては名取武光氏によりエトロフ島フルマカップにおいてⅢ—b式土器が副葬された墳墓が発掘[35]されている。また，東北地方では青森県・秋田県・岩手県，それに宮城県北部までかなりの地点において江別Ⅲ—b式あるいは同Ⅳ式土器が採集されている[36]。現在のところ，東北地方での最南端の資料は，山形県の寒河江市内から採集されたもの[37]という。

このように，江別文化の末期になると，いかなる理由か北海道中が均一的な様相を示すようになり，さらにその周囲にこの文化の勢力が伸張する。文化圏がやや縮少するとはいえ，この次にくる擦文式文化も同じく北海道を中心とした存在を示すものであるが，こうした両文化圏の重なりは両文化の担い手を推定する上で大きな示唆を与えてくれるように思えてならない。とにかく，これらの両文化圏の在り方は，後世でいうアイヌ民族の居住圏との大きな関係を想定せずにはいられない[38]のである。

(2)

さて，これまで概略を述べてきた江別式土器の実年代はいつ頃とみなされるのであろうか。

私は，かって江別式土器の終末が8世紀代に入ると述べた[39]ことがある。しかし一方，江別Ⅲ式——それは江別Ⅲ—b式とみなしてよいものであるが——の年代を5世紀頃とみる見解もみられる[40]のである。

江別Ⅲ—b式土器の年代を5世紀となす根拠は，それらが東北地方において古式の土師器と

共伴したとみなすことにある。例えば，盛岡市永福寺山においては，東北地方における最古式の土師器である“塩釜式”（氏家第一型式）や丁字頭勾玉等が伴出[41]したという。また，宮城県玉造郡岩出山町の木戸脇裏遺跡および村山遺跡からは江別Ⅲ—b式的な特徴をもついわゆる北大式土器片が出土しているが[42]，この両遺跡からも最古式の土師器（塩釜式）がみられ，両者の共伴の可能性が指摘されているのである。

たしかに，上記の共伴関係が事実であれば，江別Ⅲ—b式土器あるいは江別式の直後に位置するいわゆる北大式土器の実年代を5世紀に比定することはまったく妥当であるといえよう。しかしながら，私にとってその年代比定は納得しがたいものである。私がそのように考える直接の根拠は，後に述べることとして，まず，永福寺山・木戸脇裏・村山の各遺跡における共伴関係が確実なものかどうかを検討してみる必要があるように思われる。

永福寺山遺跡においては，数個の墓壙状竪穴の内外からこれら江別式・塩釜式の土器がともに出土したというが，その他に天王山式系の弥生式土器や縄文式中期の土器の破片も得られた由である。木戸脇裏遺跡では，先に述べた種類の土器の他に糸切底土師器・須恵器が採集されており，村山遺跡からはさらに弥生式後期の土器も採集されている。ともかく，これらのいずれもがいくつかの時期の複合したものであり，それら各時期の遺物の層位関係及び共伴関係が良好な遺跡とは言えない。したがって，これら各遺跡での江別式土器あるいは北大式土器が本当に塩釜式土師器に伴なうものか，あるいは他の種類の土器と同時期なのか，また単独の時間性を有するものか，にわかに断定し得ない状況にあるように思えるのである。

そこで，次に，所謂“北大式土器”なるものを通じて，江別式土器の実年代推定の手がかりを追求してみたい。

(3)

“北大式土器”の名称を最初に唱えたのは，故河野広道博士であった。同博士はこれを，当初“後北E式（北大式）”と名付け，「縄文土器から擦文土器への移行期の土器」と記述[43]している。その後，さらに“北大式＝後北E式”と書き現わされ[44]，以後，一般には“北大式”の名称のみが使用されるようになり[45]現在に至っている。

“後北E式（北大式）”と表現した時点にあっては，河野博士は明らかにそれに後北式土器中に含まれるべき一形式としての位置を与えている。名取氏がかって後北D_2式としたのも，同様の見解に立つものとみなし得るのである。それが，“北大式＝後北E式”とされるようになった段階では，江別式土器から擦文式土器への移行期の土器としての独立した形式とみなすに至っているようである。北大式と河野博士の名付けた所以は，北海道大学構内の，ポプラ並木で有名な同大学農学部農場から出土した土器を標式とした故であり，名取氏も「D_1型式が江別墳墓に多数発見されたのに対しD_2型式は札幌帝大構内の墳墓で多数発見され……」と述べているのである[46]。

もっとも，“北大式”という名称が一般に用いられるようになっているとはいえ，北海道大学構内からの発掘資料は何らの報告もなされてはいず，その内容説明も，必ずしも明確であるとは言えないため，近年発掘され報告されている，内容を具体的に把握し得る資料を改めて基とし，そうした資料の得られた遺跡名を冠すべきである，とする松下亘氏の見解もみられるに至っているのである[47]。

さらに松下氏は，河野博士のいう北大式土器のグループに含めてよいと思われる土器がさらに分類可能なことを指摘[48]している。それは，後北式に関係あると考えられるものを一類，擦文

式と関連あると思われるものを二類とする分類である。この場合，分類の基準として，器形・胎土焼成・施文方法等，一応総合的なものがあげられる。そして，こうした分類が単に形態的な相違ではなく，編年的な細分にも通じるのではないかという疑問を提示しているのである。さらに，松下氏は，この二類が続縄文式文化の終末に位置するものと予想しながらも，その確実な編年的位置づけや一類との関係等の諸点を今後追求すべき課題として示したのであった。

この松下氏の論考が口火となったかのように，その後間もなくこの所謂"北大式土器"の出土した道東阿寒町のシュンクシタカラ遺跡及び同町殉公碑公園遺跡[49]，積丹半島共和村の発足岩陰遺跡[50]の発掘報告書が刊行され，それと共に，その前年に報告されたアヨロ遺跡[51]の発掘資料が注目されるに至っている。そして，前2遺跡の報告者の1人である沢四郎氏は，それが3形式に分類されることを考察している。

以後，この所謂"北大式土器"のグループは，江別式土器との関係において，あるいは擦文式土器との関係において，もはや看過されることなくその内容・性格をめぐって，あるいは編年的位置づけについて常に何らかの形で論及されているのである。

まず，佐藤達夫氏は北大式という名称は用いないが，"江別式以後"と記して続縄文式時代の末期に位置づけている[52]。千代肇氏もこの土器のグループ——千代氏は"北大式"という名称を用いる——が続縄文式期に含まれるものと理解し，続縄文式期を前・中・後期に3分類したうちの後期——江別式土器を中期に位置づける——に当るものとした[53]。

さらにその後，それが3分類され得ることを明確に述べたのは森田知忠・斎藤傑の両氏[54]である。もっとも，両氏の言う内容は極めて一致をみせるが，それらの編年的位置づけに関しては，かなりの相違を示している。まず，森田氏は，館浜文化——本小論で述べている江別Ⅲ—b及びⅣ式の時期に相当する——の伝統の推定される貼付文が付されるグループを北大Ⅰ式，斜縄文・太い沈線文をもつものを北大Ⅱ式，斜縄文・沈線文の出現頻度のもっとも低いグループを北大Ⅲ式と分類し，このⅠ式→Ⅱ式→Ⅲ式の編年的順序を考えているようである。そして，北大式Ⅲ式の仲間が続縄文式文化の末期に属し，擦文式文化に先行するとの考えのようである。一方，斎藤傑氏も，この所謂"北大式土器"を文様の上からA～Ⅰの8つに分類し，そのA～Dのグループ（江別式土器の中心的な文様要素である隆起線をもったものとみる）を北大Ⅰ，E・Fのグループ（縄文と沈線との組み合せによるもの）を北大Ⅱ，G～Ⅰのグループ（伝統的な縄文が失なわれ，器形においても明らかに土師器の影響を受けていると考えられるもの）を北大Ⅲとし，やはり北大Ⅰ→北大Ⅱ→北大Ⅲの編年的序列を考えている。ただ森田氏との相違は，森田氏が北大式土器の類を，擦文式土器の成立に大きな役割を果したと考えられる土師器[55]にもその大部分が先行するとみるのに対し，斎藤氏は北大Ⅱ及びⅢが，そうした土師器と時間的併行関係にあると位置づけていることである。

近年，菊池徹夫氏は，この所謂"北大式土器"を"プレ擦文式"と称し，続縄文式土器とは区別しながらも擦文式土器の前段階に位置[56]せしめている。そして，それらを上記の如き土師器と併行関係におき，また，この"プレ擦文式"を介在として続縄文式土器と擦文式土器とが連なる[57]と述べている。

さらに最近，佐藤達夫氏もまたこうした類の土器グループに対する氏独自の見解をより詳細に論じておられる[58]。それは，上記諸氏区分の3期を一連の変遷として捉え，かつ同一型式名をもって呼ぶのはどうであろうか，との疑問を提示し，松下氏のはじめの分析に戻り，同氏のⅠ類土器を江別式土器の仲間として分離し，江別式以後の続縄文終末期の土器とすべきことを述べている。そして，これをさらに1類～5類の5期に細分し，その数字の順に推移するものと

されるのである。

さて，私もかってこうした所謂“北大式土器”について触れ[59]，江別式土器から擦文式土器への移行形式とされるその位置づけに疑問を投げかけたことがあった。即ち，北大式土器における擦文式土器につながる要素というものが，擦文式土器成立に大きな役割を果した由良式の類の土師器にすべて求められること，そして，江別式土器に近い北大式土器中にも土師器の影響のみられるものがあること――即ち，江別Ⅲ―b及びⅣ式土器に土師器が接触し北大式土器が生じたと考える[60]――したがって，北大式土器が初期の擦文式土器と併存関係にあったこと，そこから，江別式土器の終末，ひいては続縄文式文化の終末が8世紀の前半まで降る可能性が強いことを述べたのであった。

私のこうした考えは，基本的には現在も変っていないし，また，より詳細に論じる機会を得たいと考えていたわけでもあった。そこで，ここに前記諸氏の論考を踏まえながら私の考えている北大式土器について，以下に論を展開したい。　　（未完）

註

(1) 河野広道「北海道式薄手縄紋土器群」〔犀川会編「北海道原始文化粟英」（東京，昭和8年）所収〕.

(2) 名取武光「北海道の土器」〔「人類学・先史学講座」第10巻（東京，昭和14年）所収〕.

(3) 河野広道「斜里町史・先史時代史」（「斜里町史」所収，昭和30年）及び同「網走市史・先史時代篇」（「網走市史」所収，昭和33年）.

(4) 河野広道「北海道の土器」（「郷土の科学」第23号，札幌，昭和34年）.

(5) “北大式”の謂は，その形式の土器が北海道大学構内農学部農場から多数出土し，それを標式としたことにある〔(4)参照〕．名取は註(2)論文において「D_1型式が江別墳墓に多数発見されたのに対しD_2型式は札幌帝大構内の墳墓で多数発掘され」と記している.

(6) 森田知忠「北海道の続縄文文化」（「古代文化」第19巻第2号，京都，昭和42年8月）.

(7) (6)文献，第2図.

(8) 山内清男「日本遠古之文化」（補註付新版，東京，昭和14年），補註(44)参照．同「縄文文化の社会」（「日本と世界の歴史」1所収，東京，昭和44年）.

(9) 林　欽吾「日本北地の古文化と種族」（「ロシヤ人日本遠訪記」付篇，東京，昭和28年）．佐藤達夫「モヨロ貝塚の縄文，続縄文及び擦文土器について」〔駒井和愛編「オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡」（下巻）別篇，東京，昭和39年〕．同「擦紋土器の変遷について」（東京大学文学部考古学研究室編「常呂」第7章第4節，東京，昭和47年）．千代　肇「北海道の続縄文文化と編年について」（「北海道考古学」第1輯，札幌，昭和40年）.

(10) 高橋悦郎「江別市対雁坊主山遺跡の発掘略報」(1)～(3)，（「ウタリ」第3巻第8号～10号，札幌，昭和35年10月～12月）．同「江別市対雁坊主山遺跡発掘調査略報」（「アイヌ・モシリ」第5・6合併号，札幌，昭和36年）．なお，これらの高橋悦郎氏の発掘報告は，坊主山が工場用地として破壊されるに際して行なわれた発掘の報告である．したがって，調査地域は坊主山のみに限定されている．遺跡自体は坊主山も含めてより広範囲である.

(11) 天塩川口基線遺跡第3号竪穴出土の一括土器資料を眺めてみると，森田氏がチプスケⅡ式に当るとしたものなどは石狩低地帯以南において出土しないであろう．もっとも，森田氏の坊主山Ⅰ式は，こうした道北・道東部的な土器，あるいは恵山式土器的なものを除いた残りを指しているようでもある．しかし，その場合においてもなお，この坊主山Ⅰ式の内容は，実際の江別坊主山出土の資料との対比において納得のいかない点がある.

(12) 註(1)論文参照．なお，発掘報告としては註(10)に掲げたものの他に，河野広道「北海道江別町円形竪穴式墳墓発見の石器時代人――頭骨とその埋葬状態――」（「人類学雑誌」第48巻第6号，東京，昭和8年6月）．後藤寿一「石狩国江別町に於ける竪穴様墳墓について」（「考古学雑誌」第25巻第5号，東京，昭和10年）．名取武光「北海道江別兵村に於ける竪穴式墳墓の発掘報告」（「考古学雑誌」

第23巻第11号，東京，昭和8年)，河野広道他「江別市史・第一編先史時代」(「江別市史」所収，江別，昭和45年)，がある．

(13) この北見型なるもののうちには，戦前の名取氏分類（註(2)文献）の前北B式土器に含まれるものが多くを占めているように思われる．

(14) (7)に同じ．

(15) 森田氏が"チプスケⅡ式"に当るとされているものである．

(16) 森田氏が"坊主山Ⅰ式"とされているものである．

(17) 森田氏が"恵山Ⅳb式"とされたものである．

(18) 峰山　巌氏はこうした縄文を"帯縄文"と呼んでいる〔峰山　巌「恵山式土器」(「北海道考古学」第4輯，札幌，昭和43年)〕．

(19) これらの縦位に走る縄文も，先に特殊縄文と述べたものと基本的には同一の縄回転とみなし得よう．

(20) 石本省三氏の原図による．なお，開生第20号竪穴の報告は，山崎博信「開生遺跡20号住居跡」(「北海道考古学」第1輯，札幌，昭和40年)．

(21) 昭和47年9月，石附発掘資料．報告は執筆中である．

(22) 第1図3及び常呂郡常呂町岐阜第二遺跡2号竪穴南ピット出土例のように，オホーツク海岸においては注口形ないし片口形土器が出現してもなお，上げ底の例がみられる〔東京大学考古学教室編「常呂」(前出)〕．いずれも明瞭に縞状縄文〔註(18)に述べた峰山氏の概念で言うと帯縄文であろう〕が認められる点から，Ⅲ—b式に含めるべきと判断するが，あるいはⅢ—a式に属せしめるべきかとも考えている．もしそうとすると，オホーツク海沿岸においては，そうした器形がいち早く出現したことになる．この点については，今後一層の検討を重ねたいと思う．ともかく，Ⅲ—b式の段階で，注口・片口の器形が一般的になることは認めてよいであろう．

(23) (3)及び(4)に同じ．

(24) 註(10)及び(12)に掲げた文献にみられる発掘例を検討しても，このことは言えるようである．

(25) (6)に同じ．

(26) 例えば，岩内郡共和町の発足岩陰遺跡においても両者は同一層位に共伴している〔竹田輝雄他「発足岩陰遺跡」(小樽，昭和29年)〕．

(27) 佐藤信行「宮城県岩出山町木戸脇裏遺跡——所謂北大式の南漸資料——」(「考古学雑誌」第53巻第4号，東京，昭和43年)．興野義一・遠藤智一「宮城県玉造郡岩出山町の考古学遺跡」(「岩出山町史」別刷，岩出山町，昭和45年)．

(28) 本小論で述べている江別式土器を標式とする文化を，こう名付ける．

(29) 関　秀志「羽幌地方の先史時代」(「羽幌町史」所収，羽幌町，昭和43年)．

(30) 千代　肇「北海道の続縄文文化と編年について」(「北海道考古学」第1輯，札幌，昭和40年）第Ⅲ図の10．なお，勇払郡鵡川町の汐見遺跡第1地点第1号墳墓第4墓穴出土の土器も江別Ⅰ式に含めるべきか否か問題となろうが，私は現時点ではそれが江別Ⅰ式の直前のものであろうと理解している．しかし，今後一層の検討を加えたい．

(31) 清野謙次「釧路国厚岸郡厚岸町オカレンバウシ貝塚」(「日本貝塚の研究」所収，東京，昭和44年)．

(32) 竹田輝雄「茶津洞窟遺跡」(小樽，昭和37年)．なお，本州においても，江別Ⅱ式に属すると報告されている例が秋田県鹿角郡小坂町出土土器にある．しかし，それは縄文式中期のものであろうと私は考えている〔奥山　潤・安保　彰「奥羽地方の帯状文土器及び後北B併行式土器」(「北海道考古学」第2輯，札幌，昭和41年)〕．また，これはかなり異質ではあるが，下北半島脇野沢村の九叟泊岩蔭遺跡出土例が，あるいはやはり江別Ⅱ式併行であるかもしれない〔江坂輝弥他「青森県九叟泊岩蔭遺跡調査報告」(「石器時代」第7号，東京，昭和40年）第9図33参照〕．

(33) 下北半島大間崎鳥間遺跡や同半島九叟泊岩蔭遺跡出土例中にそうとみなし得るものが存在する〔橘善光「大間崎鳥間遺跡の土器について」(「北海道考古学」第9輯，札幌，昭和48年）第2図16．江坂他「青森県九叟泊岩蔭遺跡調査報告」(前出）第9図32〕．

(34) 伊東信雄「樺太先史時代土器編年試論」(「喜田博士追悼記念国史論集」所収，東京，昭和17年)．

(35) 名取武光「北海道国後島古釜府における後期薄手縄紋土器期の竪穴様墳墓」(「考古学第11巻第11号，東京，昭和15年)．その他，滝口　宏「エトロフ島の土器」(「古代」第11号，東京，昭和28

年), Голубев, В. А., "Древние Культуры Курильских Островов" ("Сцбирь и Её Соседи в Древности", Новосибирск, 1970) 参照. 後者には国後島出土の江別Ⅲ—b式土器も紹介されている.

(36) 東北地方のこうした土器の分布については, 吉田義昭・武田良夫「江別Ⅲ式土器の分布」(「奥羽史談」第55号, 盛岡, 昭和45年), 奥山 潤「奥羽地方の後北式土器」(「北海道人類学協会通信」No. 9, 札幌, 昭和40年), 伊東信雄「東北北部の弥生式土器」(「文化」第24巻第1号, 仙台, 昭和35年), 同「東北古代文化の研究」(「文化」第35巻第1・2号, 仙台, 昭和46年) 等参照.

(37) 佐藤信行「寒河江中学校所蔵の後北D式土器」(「村山考古」第7号, 河北町, 昭和38年).

(38) 東北地方において, このような北海道的な土器を残した人々がアイヌ民族と関係あるであろうとする見解は, 山内清男・伊東信雄両氏も述べておられる〔山内清男「縄文文化の社会」(前出), 伊東信雄「東北古代文化の研究」(前出)〕.

(39) 石附喜三男「北海道における土師器の諸問題」(「先史学研究」第5号, 京都, 昭和40年), 同「擦文式土器の初現的形態に関する研究」(「札幌大学紀要教養部論集」1号, 札幌, 昭和43年). なお, 菊池徹夫氏も私とほぼ同様の見解をもっておられる〔菊池徹夫「擦文式土器基本形態の形式」(「北海道考古学」第8輯, 札幌, 昭和47年)〕.

(40) 伊東信雄「東北古代文化の研究」(前出). 山内清男「縄文文化の社会」(前出), 及び(27)に同じ.

(41) 吉田・武田「江別Ⅲ式土器の分布」(前出), 大塚初重「特集・1966年の考古学会 古墳時代」(「考古学ジャーナル」第7号, 東京, 昭和43年).

(42) (27)に同じ.

(43) (3)に同じ.

(44) (4)に同じ.

(45) 例えば, 河野本道他「江別市史・第一編先史時代」(前出), 森田知忠「北海道の続縄文文化」(前出), 斎藤傑「擦文文化初頭の問題」(「古代文化」第19巻第5号, 京都, 昭和42年), 千代 肇「北海道の続縄文文化と編年について」(前出). その他, 個々の発掘報告等において "後北E式" の使用は見当らなくなっている.

(46) (5)に同じ.

(47) 松下 亘「いわゆる北大式についての一考察——続縄文文化の終末と擦文文化の初源との問題——」(「北海道地方史研究」第46号, 札幌, 昭和38年).

(48) (47)に同じ.

(49) 沢 四郎他「北海道阿寒町布伏内シュンクシタカラ遺跡発掘報告」及び 沢 四郎他「北海道阿寒町殉公碑公園遺跡発掘報告」〔ともに「北海道阿寒町の文化財」先史文化篇第1輯, 阿寒町, 昭和38年) 所収〕.

(50) 竹田輝雄他「発足岩陰遺跡」(前出).

(51) 名取武光・峰山 巌「アヨロ遺跡」(「北方文化研究報告」第17輯, 札幌, 昭和37年).

(52) 佐藤達夫「モヨロ貝塚の縄文, 続縄文及び擦文土器について」(前出).

(53) 千代 肇「北海道の続縄文文化と編年について」(前出).

(54) 森田知忠「北海道の続縄文文化」(前出), 及び斎藤 傑「擦文文化初頭の問題」(前出).

(55) 空知郡栗沢町由良遺跡出土の土師器等を指す〔石附「擦文式土器の初現的形態に関する研究」(前出)〕.

(56) 菊池徹夫「擦文式土器の形態分類と編年についての一試論」(「物質文化」第15輯, 東京, 昭和40年).

(57) 菊池徹夫「擦文式土器基本形態の形式」(前出). こうした見解は, 河野広道博士の説いた "移行形式" のそれと同類とみて良いであろう.

(58) 佐藤達夫「擦紋土器の変遷について」(前出).

(59) 石附「北海道における土師器の諸問題」(前出), 及び同「擦文式土器の初現的形態に関する研究」(前出).

(60) このことは, 前註論文では必ずしもそのままの形では明記していない. しかし, そうした考えに立って論を進めたものであり, 雄山閣出版の新版考古学講座所収の「北海道の原史文化」(昭和45年) ではその旨を述べている. なお, この立場は河部広道博士がすでに唱えておられるのに拠っている.

(末完)